Edward Conze :

Buddhist Thought in India

片野道雄

体系的な解明に基いた佛教々学は、漸く、世界思潮の上に新らたに認識され、求められ得るようになって来たようである。本書も、それに寄与するもので、インドに於ける佛教思想史上に観られる佛教の、主要な課題に観点をおいて、論述し、解説しようとした最近のヨーロッパ人の労作であり、一種の思想史入門書である。著者については、既に国内に於いても色々と評価されており、この誌上で、われわれの如き浅学の者の言葉を要しないであろう。

序文から窺われるように、著者には、包含的で且つアカデミックな佛教の案内書が未だ産出されるに至っていないという使命感と、人類の歩んできた精神文化に注視して、現代世界が単に佛教思想を利用しようとするのでなくして、世界全体が、何らかを体得しようとしているという時代感覚とが窺われ、世界が何らかを体得しようとしているのは、佛教のそれに目差している課題にある、という見方に立っているようである。本書は既刊の"Buddhist Meditation"(Allen & Unwin, 1956, 1959)の後編として、三十年間の研鑽の賜物であると云われる。序文の終りに'A. B. Keith の Buddhist Philosophy in India and Ceylon (1923), E. J. Thomas の The History of Buddhist Thought (1933), Stcherbatsky の Buddhist Logic, L. Silburn の Instant et Cause (1955), E. Frauwallner の Die Philosophie des Buddhismus (1956) などに関説し、T. R. Murti 氏と一致して、佛教の本流は中観佛教にあると看做している。それにしては、大乘の項目に費すスペースが比較的少ないようであるが、初期佛教思想を解説するに当って、中観佛教を想起して、その初期佛教思想を述べているところにそれは窺えるようである。

本書は、Archaic Buddhism, The Sthaviras, The Mahāyāna の三編を以って構成されている。

第一編では、先ず近代ヨーロッパの哲学者が、断固として受けつけていない暗黙の仮定(六項目上げる)について、全く東西哲学の相互の不理解によるものと指摘して、西洋思想をも考察しつつ、佛教のより正しい認識を試みようとしている。第二章はこの編で述べようとする概説であり、要旨を簡潔に纏めている。

Theravādin にのみ限定することなく、広く、Sarvāstivādin や Mahāsaṅgika の流れである Mahāyanist など全佛教に共通する根本課題を、然もそれが我々にとりまく経験世界の特質として、三法印、即ち impermanent (anitya), ill (duḥkha), not-self (anātman) を、及び四顛倒を主題としており、佛教

の用語に不慣れの者にも、平易によく解説しているようである。佛教研究に携わる者にとっては、佛教思想の主流を物語る親しみ深い教説である。

次に、かかる自己のすがたが自覚されていく佛教者の実践道（著者は人格の新たな誕生という）として、五の主要なvirtueを述べている。1. faith 2. vigour 3. mindfulness 4. concentration 5. wisdomと英訳され、佛教用語でいう信・勤・念・定・慧の五力を解説している。そして、涅槃ということに於いて完結する救済、解脱ということの最終段階について、空、無相、無願という三解説の教説などを伺察しつつ、更に、涅槃という佛道理念を、非常に注意して解説しているように窺える。然もそうゆう佛教性が更に追求し検討されて、涅槃ということの必然性としての、我々世間の形態へのはたらき（菩薩精神）に注意している。語るまでもなく、迷える存在の転迷開悟が達成せずば、佛の佛たること円満せずということを内容とするものであろうが、かかる世間への cultivation ということを、friendliness, compassion, sympathetic joy, impartiality（四摂事）の言葉に着眼して解説し、キリスト教で云われる愛などの概念とも比較検討している。

第七章では法の概念を扱い、この事項は最初に論議すべきものであるが、教理として難解の為に終りに設けたという。先ず「法」について、佛教伝承上哲学的に重要な概念として七種類に分類し、詳説している。次に五蘊、十二処、十八界を語り、五蘊に於いては識が最も重要であり、且つ理解しにくいと云う。一々について解説するという丁寧さであるが、人間存在の本質は、蘊処界の中の各々consciousness, mind, mind-consciousness によって現わされるという。そして、それらの理解に当り、最初に注意すべきことは法としてとられる識が、如何に己が身に関係づけられるかということであるという。第二に、識の三様に示されている基礎的な意味を明瞭にする。第三に、この世から解脱する過程に於いて、識の作く重要な役割を伺察することにあるとして詳説している。

第二編では、ブッダ（佛陀）入滅以後五世紀の間の、学派発達の様子を語り、伝統に従って十八の学派の概説から始る。上座部（Sthaviras）と大衆部（Mahāsaṅgikas）に大別し、後者は第三編に関連するから、ここでは触れず、古典派とも称すべき上座部の諸学派の概説が中心である。然も主に Sarvāstivādins, Theravādins の思想で、著作の依用したテキストとしてAṭṭhasālinī, Dammasangani の注釈書、Visuddhimagga, Abhidharmakośa 及びその注釈書、Abhidharmasamuccaya 等を上げている。

この編で論ずる思想は、前編で扱ったと同じ課題が中心となっている。無我、無常ということを更に吟味しており、同時に我、プドガラの解説に及んで、第四章では、前編で「法」が問題になった点の、この時代の発展し組織化された教学を概説し二、三の問題を提起している。

第三編に於いて、先ずSthavirasの思想を顧みつつ、部派としての Mahāsaṅgikas から大乗への展開を論じている。そし

て、ある意味で Mahāsaṅgikas, Mahāyānists は Sthaviras の rationalism に対して mystics であり、Theravādins や Sarvāstivādins の mystically tinged rationalism に対して Mahāyāna の rational mysticism というように、諸思想の特色を述べている。

次に、第一編第二編に於いて解説した我々にとりまく経験世界のすがたの、そしてその無明ということの重要性を想い起さしめる顚倒（viparyāsa: perverted view）ということの、この時代の新たな解釈を説明している。

次に、六波羅蜜を論じ、それは初期佛教で既に解説された五の重要な virtues の発展形態として扱う。そして、波羅蜜行の成就によって、四摂事が語られ、然も所謂そうゆうことは、菩薩行としての社会・世間に対して新たなる役割をもつに至るという。次下、The new ontology, The Absolute and the Buddha, The new map of the Path の項目を出して、大乗としての特色をもった佛教性がフランクに摘出されているようである。

以上が第一章として大乗佛教全体の上に立って解説されたものであるが、次に第二章以下中観思想、瑜伽唯識思想、佛教論理、タントラ思想の概説を施している。

第二章は、始めに中観を理解する上の文献を上げている。それらは周知の如くナーガールジュナ、アールヤデーバに帰せられている諸論書、及び中論の註釈書プラサンナパダーであり、後期中観派のテキストとして、Boddhicaryāvatāra, Tattvasaṅgraha, Bhāvanākrama など代表作としている。本書でも暫々般若経と共にプラサンナパダーによるところ多く見られ、ここでも中論釈を特筆している。著者にはチベット訳、漢訳テキストを参見するに到っていなかったようであるが、その為であろうか、或は、佛教学研究の現段階を考慮してのことか、ナーガールジュナ、アールヤデーバの思想は、未だ十分に理解されていないという。又、Bhāvaviveka の Svatantrika system や、瑜伽中観派の教えとか、諸問題の研究に、今日未だ不明瞭な点が多いと指摘している。

次項で Description of the Mādhyamika dialectic と題して、ともかく中観派は、絶対性ということの超越的な直観を支配している縁起、その一の課題のみに関心が注がれたと注意して、その主点を基にして、own-being（svabhāva）が佛教の伝承の上に三様に用いられている点を摘要し、中観佛教の特色とその解説に努力している。この種の思想は、一般の人に容易に理解されそうにないが、けれども考え方自体に矛盾がないという。如何なるものも都て実体のないことを示し、たゆみなく示されることによって確かめられていく精神的な自由の理念によって、中観の教義は終始語られているという。

次に Emptiness, Nihilism の項目を出し、空の教説は、一の理論的な提案として Nihilism の単なる主張というように結局は見られがちであるが、けれども、空の教は、ただ void のみが存在するというように意見を提出しているのでなく、都て空も亦肯定されると共に、否定されねばならないという。空性

とは、塩けの味のある食物として、宗教的な生活にしみこんでおり、その生活に味を与える。塩けの如く空性それ自身に、特に味がいいとか、滋養に富むということではなくて、この教義に隠れた精神的な意図が考えられるべきであると云う。そのことは、吾々に取りまく世界の完全な解脱にあって、議論する手蔓とか、一の見解を示す為ではない云々と云って解説している。

瑜伽行派の解説である第三章も、先ず主な文献を紹介しており、チベット訳、漢訳テキストについては著作自身依用出来なかったようであるが、ともかく、それらを通して三性説など瑜伽行派の思想を概説しようとしている。

哲学的な観点から最も重要な作品に、解深密経と入楞伽経の二経、唯識二十論とスティラマティの註釈のある唯識三十頌を著わしたバスバンドフの二作品、アサンガの摂大乗論、マイトレーヤナータに帰せられる大乗荘厳経論、弁中辺論、護法の成唯識論、及び瑜伽師地論を示し、中観派との関連に言及しているが、概説である。然も、この思想の最も特色のある教義としてidealismというが、誤解を招く懸念がしないでもない。とはいってもヨーロッパでの数少ない解説の一の試みとして貴重に思われる。

第四章は佛教論理を扱い、第一項では初期大乗佛教の論理を次にThe later logiciansと題して佛教論理に触れているが、著者はそれらを専門としていない為か、見るべきところがないようである。第五章でタントラ思想に数頁を費している。

以上、内容を紹介することによって、当面の新刊紹介にかえようとするものである。この書は初歩の読者にも理解しやすいよう配慮されているようである。しかし、筆者の語学力に乏しいこともあってか、伺察し解説するよりどころとなった原典の言葉が、暫々見られない為に当惑したところもある。またわが国に於いても、漢訳、チベット訳文献を含めての佛教研究が進んでいるのに、それらの書物や諸論文が、参照されていないことは残念である。ともかく、比較的多くの註もあり、ヨーロッパに公刊されている諸論文が知られる上、著者が如何に理解し叙述しているかを知ることによって、現代文明社会のよりよき創造の為に、世界性をもつ佛教を、われわれがより正しく理解認識するのに、本書の寄与するところ多いようである。

なお、本書は、佛教思想の中国日本への伝承、ヒンズー思想との関連などについては殆ど触れていない。著者は、それらに触れなくても十分インド佛教思想を論ずることが出来るという立場をとっている。

（Geoge Allen & Unwin Ltd., 1962. 14×22 cm, 302p.）